

当院は2009年10月 腹部大動脈瘤に対するステントグラフト実施施設となり、
2009年11月より治療を開始しました。

腹部大動脈瘤とは、

腹部大動脈瘤は動脈硬化などにより腹部の大動脈がこぶ状に膨らんで、自覚症状はないものの破裂すると突然死にいたる重篤な疾患です。動脈瘤がまだ小さく、破裂の危険性が低いと判断された場合は、定期的なCTで経過を観察していきます。しかし、動脈瘤が大きい、または急速に拡大している場合は、治療を行うことが薦められます。

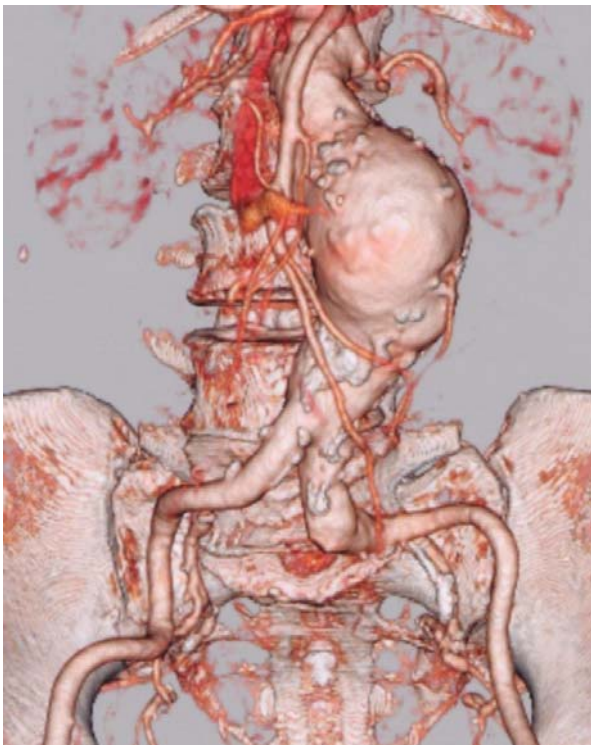
治療法としては、全身麻酔、開腹による人工血管置換術が主流でしたが、近年は、開腹せずに両足の付け根からカテーテルを挿入し血管内から治療するステントグラフト内挿術が行われています。この方法だと、腹部を切開する必要がないため、治療翌日より食事、歩行が可能で、従来の開腹手術に比べ入院期間が短縮し、術後合併症も少なく、また患者様の負担も少ない最先端の低侵襲治療です。ただ、現時点では患者背景、大動脈瘤の形態等により適応が決められています。

当院は従来の人工血管置換術による治療経験も多く、久留米大学病院（ステントグラフト内挿術においては九州で最初に治療を開始し、最も症例数が多い）より田中厚寿医師らのステントグラフト内挿術指導医と協力、連携し、患者様一人一人に合った治療方法を行っています。

動脈瘤の患者様がおられましたら、またステントグラフトについて質問などありましたら当院心臓血管外科にご相談いただければ幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

当院1例目の腹部大動脈瘤に対するステントグラフト内挿術（術前・術後）

（術前）



腹部大動脈がこぶ状にふくらんでいる

（術後）



挿入されたステントグラフトにより、こぶ状の動脈瘤が無くなっている

術後経過も良好で、術翌日より経口摂取、歩行開始。術後7日目に創部の全抜糸を行い、術後8日目に自宅退院となった。